

香道とその香りについて

香りの世界の扉を開けば...

香道 泉山御流悠潺庵 川畑華香

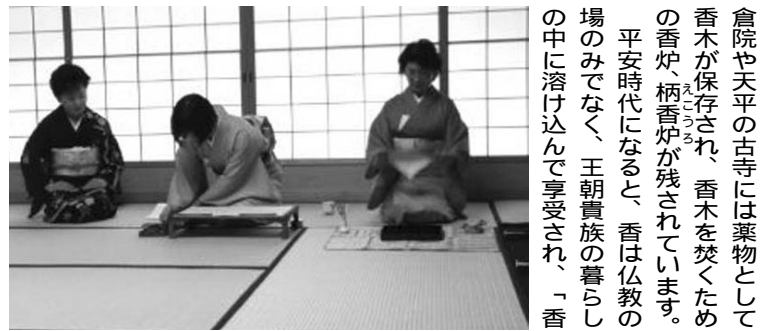
香道は日本人が創作した素晴らしい「香りの芸術・文化」です。花鳥風月をこよなく愛した平安朝の貴族たちの典雅な遊びをその源としています。

この度、平成二十六年の冒頭に弥生会の皆様に香りの文化をお伝えできることは、長く香道に携わってきた私にとりまして大きな喜びでございます。飛鳥時代よりの伝統を持ち、千四百年間絶えることなく伝えられた「香りの世界」。

その香りが語りかけるものに耳を澄ませると、五感が開かれ、伝統文化にはぐくまれた日本独自の香り文化が見えてきます。

香道は香りを聞いて中てて楽しむ典雅な遊びであると同時に、香を学ぶ上で付随するものが多く、総合芸術として豊かな人間を育てる道でもあります。

その起源は飛鳥時代に伝えられた仏教の伝来が源となり、異国からもたされた香木は、仏への供香として用いられるようになり、正



倉院や天平の古寺には薬物として香木が保存され、香木を焚くための香炉、柄香炉が残されています。平安時代になると、香は仏教の場のみでなく、王朝貴族の暮らしの中に溶け込んで享受され、「香

り「匂い」の語は、眼に移る美しさや華やかさを讃える言葉にもなり、和歌や物語を醍醐とかざりました。

王朝の香りは薫物として花開き、優品を競った薫物合わせは、後の「香木賞翫」から香りを聞き中てる香の文化「香道」へと、室町時代に結実したものです。

香道の世界で最も大切なことは、香を聞く、聞香です。香道では香を「嗅ぐ」とか「匂ふ」とは云いません。「香を聞く」と申します。それは香の本来が嗅覚的なものではなく、精神的な世界であることを意味しているからです。

「岩国市認知症高齢者の見守り支援協議会」設立総会に参加して

副会長 館澄子



平成25年11月1日、岩国市役所多目的ホールにて標記の協議会が設立されました。規約第2条(目的)に「本会は、

認知症高齢者が尊厳を保ちながら穏やかな生活ができ、家族も安心して社会生活を送ることが出来るよう、様々な団体、関係機関、市

内の企業が認知症への正しい理解の下、認知症予防、認知症の早期発見・早期対応、認知症高齢者や家族に対する支援に向け、協働して取り組むとともに、地域において認知症やその他家族を見守る体制を構築することを目的とす」とあります。

この問題は、弥生会の会員の大多数の方にとっても避けて通れないことです。会報「やよい」でも、21号、22号と取り上げてきました。知らないより知っていることが大切なのです。これからも機会ある毎研修を重ね、地域・近所・家庭の中の認知症高齢者を見守る知恵を得る努力をしましょう。

初香の会に参加して 村上泰子



以前より香道に興味を持っていましたので、良い機会と参加させて頂きました。平安の昔から貴族の遊びとして伝わったと云われるだけに、何と雅なことでしょう。しつらえ一つにも心を砕かれ、季節を表し、お手前の約束事も知ることが出来る、とても素晴らしい時を過ごさせて頂きました。

心を一つに集中させて香りを聞く、という時間は雑用に追われ日々を過ごす者にとって、心豊かになるひとときでした。がさつな私があぐれにも香りを聞き当てる事が出来たのも、うれしいことの一つでした。

川畑先生の説明をうかがいながらの会でしたので、密やかな話し声はありましたが、平生は静寂の中で香りを聞くとのこと。遠い昔、お茶席でお湯のたぎる音だけの吸い込まれるような心地がした時間を思い出しました。

例えば、お茶もお香もルーツは一つかもしれません。お香はもつと洗練されたもののように思います。本当に素晴らしい経験をさせて頂き、企画された方や裏方をしてくださった方に感謝しております。

お香の会に参加して 藤田栄子

最初聞いた鶴と亀の二種の香と初めての香を聞きあてる「蓬莱香」で、私は一つしかあたりませんでした。隣の席の市長夫人は全てあていらつしやり、初めてだとうかがっておりましたが、さすがだと思いました。

お香はその場を別世界のような空間にし、緊張感もありましたが、香りの素晴らしさに身も心も満足感でいっぱいになりました。その後お抹茶を頂き、和気あいあいと過ごせたことに感謝でした。